

特別インタビュー

# 未来の世界像を「海賊史観」から探る

稲賀繁美

## アジアの知恵を結集する

—稲賀先生には2014年度から外国人留学生研究助成プログラム・人文科学部門の審査をご担当いただくことになりましたが、基金についてはどのような印象をお持ちでしたか。

実は、これまで小林節太郎記念基金についてはほとんど事情を知らずにいたのですが、設立からすでに30年の実績があると伺い、正直驚きました。そして、初期の助成対象者が大成した学者として多方面で活躍され、国際的な学術交流や多国間の流通現場の第一線で活躍しておられることに感銘を受けました。

こうした事業は、総体として日本が文化や学術振興でどのような国際貢献を行い、それがいかに国益に奉仕するかを示すだけでなく、将来の世界を築く指導者の育成にも貢献するものだと思います。今後、このような社会貢献を地球的規模で達成するためには、個別の企業を越えて企業間を横断して、産業界、学術界、さらには官僚の世界との連携をめざすことが必要ですが、この仕組みはまだ未発達という印象を拭えません。そこで小林基金に望むのは、30年という経験を有効に生かし、多元的なネットワークをつくってアジアの知恵を結集する場を創設することです。とはいうものの、遠大な計画なので簡単にできるものではありませんし、私にその一助が務まるかどうか……。

—審査された研究内容についてはいかがでしたか。

私はこれまでいくつかの助成審査に携わってきましたが、その場で危惧を感じていました。明らかに資金援助が自己目的となったような研究計画や、流行のキャッチフレーズに乗って関心を得ようとする傾向、あるいは社会貢献に直接結びつく主題にすり寄って点数を稼ごうとする安易な選択、そして、それらとは対照的に極めて専門的な学問分野の中での達成が人類の未来にとって不可欠であるかのような幻想に浸った、独善的で視野狭窄気味の自己正当化が目立っていたからです。

そうした中で、初めて小林基金の審査を担当してまず得た感触は、応募書類の水準が極めて高いことでした。人文学の分野というのは、ともすれば定番の主題に研究目標が収斂しがちなものですが、小林基金においては、既存の知見や方法とは異なった角度から斬り込もうとする野心的な姿勢、さら

にはソトからの視線とウチからの視線とが交錯する地点に新たな可能性を見出しながら自国と日本との架け橋を志そうという姿勢が、堅実な方法論と周到な計画立案で示されています。

—そういう中から合否を決定するのは大変ですね。

私が審査をする上で何より大切だと思うのは、計画の遂行に伴って、国境を越えた新たな共同研究の人的な網の目が成長し、それが将来の研究の糧となることです。申請者個人の野心ばかりがチラつく計画や、資金さえあれば、といった大計画よりは、地上の各地を結びつける人づくりの土台となるような、希望に満ちた研究が優先されるのは当然のことだと思っています。

とはいえ、いささか矛盾するかもしれませんが、こうした基準をすべて満たす計画書ばかりになってしまうと、優等生的な収まりのよい申請が優先されることになりかねません。昨今では自然科学の世界での「プロジェクト」とか「ミッション」と呼ばれる理念の影響でしょうか、はなばなしい成果達成にマスコミの注目が集まり、予算も巨大化して、すぐにも利潤を導きだせるような新発見、技術開発に研究費が投入される傾向があります。申請者は受給期間内でいかなる成果をあげうるかを事前に明記することを求められ、それを達成するためには、ときに非人間的な環境に支配されます。ノーベル賞受賞が輝かしい目標として掲げられ、*Science* や *Nature* といった雑誌に研究室の研究が掲載されることだけが唯一の目標となる、といった自然科学の傾向に異様なものを感じるのは私だけでしょうか。

図式的な言い方をすれば、人類はこの数千年、「左脳」と俗称される大脳皮質の分析的能力や論理的推論能力ばかりを発達させてきました。その一方で「右脳」の探究はともすれば非科学的とのレッテルを貼られて白眼視され、ましてや情緒や感情、そこに基礎を置く倫理観などは、いわば「置いてきぼり」を食いました。その結果、現代の人類は数千年遅れの情緒と最新の知性とに引き裂かれた生活を送っているという説もあります。

—そのような現実をふまえた上で、人文系にはどのような研究を望まれますか。

近年のヴァーチャル・リアリティー発生機器の発達や、そ

いながしげみ 1957年東京生まれ、広島育ち。東京大学教養学部卒業、同大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻博士課程単位取得退学、パリ第7大学博士課程修了。専攻は比較文化、文化交流史、美術思想史。三重大学人文学部助教授を経て現在、国際日本文化研究センター教授、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（併任）。『絵画の黄昏』でサントリー学芸賞、『絵画の東方』で和辻哲郎文化賞を受賞。



れと呼応する脳神経科学の発展は、いまお話ししたアンバランスを是正するどころか、かえってその均衡を回復不能な地点まで追いやってしまう傾向を呈しています。街頭での人間銃殺を楽しむような仮想現実映像がゲームソフトの世界を席卷し、ハリウッド映画でも物理的な暴力によって敵を撃滅するヒーローやヒロインばかりが登場しますが、これが現実世界へ越境を始めれば、極めて危険な事態が発生するのは明らかです。こうした自己中心的な暴力礼賛が横行することそのものが現実世界の閉塞状態の写し鏡であり、息苦しい日常からの脱出願望の現れなのでしょう。しかし、ひたすらそうした逃避志向を助長し、仮想現実の優位を補助するような技術革新ばかりがビジネスとして暴走するのを安穩と見物してよいのでしょうか。

技術革新の暴走を制御しつつ、金儲け主義とは別種の価値観を提唱し、あるべき人類の将来像を示しながら、それを築き上げる技法を地道に探る努力も疎かにはできないでしょう。個人としての成功や栄華の夢とは別に、こうしたいわば無私な、しかし大切な未知数の領域へと飛翔する夢も大切なはず。このような問題意識を背景とした意欲的な研究が、この時代においてはもっと出てきてもいいのではないかと考えています。

## 留学の意義と異文化理解をめぐる

—稲賀先生ご自身もパリ第7大学に留学されていますが、留学というご経験は、その後の研究にも大きな影響がありますか。

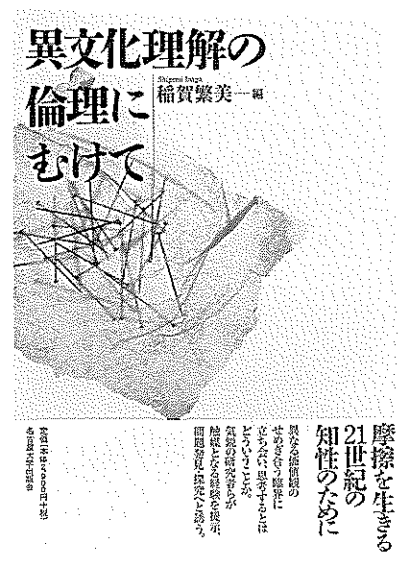
留学とは、現実への違和感、何かがおかしいなという感覚を養うための機会だと思います。とかく異文化理解とか異文化コミュニケーションが力説されますが、日本ではそれが実現されていないからお題目として繰り返されているのでしょう。理解やコミュニケーションが成立してしまえば、それでいわば「あたり」です。

本来、留学とはその両者の間にあって、自分がいままで善であり自明の理だと思っていた価値観や人生観が崩され、それを最初から考え直し、生き直すきっかけを得る機会であると割り切ったほうがよいのではないのでしょうか。もちろん留学生活がうまくゆくに越したことはないのですが、むしろうまくゆかないという挫折の体験を若いうちに踏むことが大切

でしょう。挫折から乗り越えるときに本当の友人ができますし、将来、自分たちが指導者となり、若輩の同志に助けの手を差し伸べる必要が生じたときにどのように振る舞えばよいのか、それを教えてくれるのは自分の失敗の経験以外にはありません。また、そうした数量化もマニュアル化にも適さないコツ、身についたノウハウのようなものが、実際の人生を渡ってゆく上で最大の「国際救助隊」となってくれます。そしてこのような人生の糧を先輩から後輩へと受け継いでゆくことが文化の継承であり、人類の歴史は、むしろこうした世代ごとに生身の身体にしみ込んだ、生きた知恵という形の授受によって受け継がれてゆくわけです。

—文化の継承があってこそその異文化理解、異文化交流だと。

そこについては、私が編む機会を頂戴した『異文化理解の倫理にむけて』（名古屋大学出版会）をご覧いただければと思いますが、普通の教科書は円滑な異文化コミュニケーションのスキル開発を謳い、異文化の障壁を乗り越えることに目標を置いています。これに対して私の本は、そうした意味でのガイドブックではありません。むしろ義務教育までに注入された知識や社会良識の中で善として躰られ、推奨されてきた価値観だけでは解決できない、具体的な異文化間の葛藤の問題や国際地域紛争の事例をとりあげ、執筆者たちがその現場で、当事者あるいは研究者としていかに振る舞ったかとい



稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』（名古屋大学出版会）

う体験を語り、そこからその場その場に応じた解決策を読者とともに探求するという姿勢を貫いた本です。

簡単に言うと、解決方法を正解として示すことは取越してせず、読者が同様の問題に直面したときに賢明に対処できる知恵を練ってゆく一助となることをめざしています。利害が対立する相手の立場を推測できるような精神の自在さ、一見理不尽に見える対応の背後にいかなる事情が潜んでいるかを推察できる能力、交渉相手の沈黙の苦悩を察するだけの健全な想像力、このような能力の涵養が、現場を修羅場にしないためにも、そして究極的には自らや交渉相手の生命を絶たないためにも極めて大切になってきます。それは、単にその場限りの商談を成立させ得るかどうかといった短期的な損得や利害よりもはるかに重大で貴重な経験となるはずで、「昨日の敵は今日の友」ではないけれど、利害対立から築かれた信頼関係は次の一歩への導きとなり、大きな使命を達成するために自他ともに頼れる礎石、人生の糧となります。そして、それをどこまで楽しむことができるか。これが人生という営みの醍醐味かもしれません。

異文化交流には目的地も到達点もありません。交流とは、拡げ、深め、継続してゆくことに価値がありますから。先ほど「プロジェクト」や「ミッション」といった流行りの、しかし日本語とは相性が悪いので和製英語となっている言葉に触れました。「プロジェクト」とは頭脳の中に沸いた構想を外界に投射して、それを実現することを通じて世界を改変するという企てを意味します。大航海時代以降の500年間の趨勢は、この図式に沿って企図され実現されてきました。それは、地球環境の有限性が意識される前は一見「善良」そんな言葉でした。

そして「ミッション」について言えば、冒険映画の表題にも頻りに登場しますが、こうした野心的な企てに倫理的な正

当性を植え付けるための口実ではなかったかといぶかしんでいます。

しかし、21世紀を迎えて、科学技術の進歩がそれだけでは必ずしも人類の生存にとって有益ではないことも明白となりました。科学は過去の誤謬を事実に基づいた検証によって是正し、真実の領域を嵩上げていく営みであるといまだに素朴に信じられていますが、実際には新発見は数カ月で陳腐化し、それ以前の業績は埋もれて見失われているのが現状です。科学史的知見は現場の若手研究者にとって無意味となり、かつての天才伝説だけが劣化して英雄譚となって生き残り、その傍らでは科学技術の巨大化とともに、思わぬ連鎖反応や見落とされてきた伏在系の短絡から、予期せぬ事故が発生するようになっています。

問題はそれだけではありません。実体経済より数十倍も巨大な架空金融取引に世界経済が呑み込まれたため、景気の予測や制御は専門家にも不可能となり、学説の開陳が株価操作に連動する事態が生まれています。他方では現実の投資が落ち込み、税収入りが恒常的な赤字を累積するため、高度経済成長期に構築・整備された都市基盤や流通基盤の維持もままならぬ状態となっています。大量生産・大量消費の夢が破綻してもう数十年が経過しているにもかかわらず、人気取りの政策によって権力を維持するしかない政治世界は、社会の価値観の舵取り役としての機能を喪失しています。

## 地球市民として

—そこを打破するにはどのような手立てが必要となりますか。

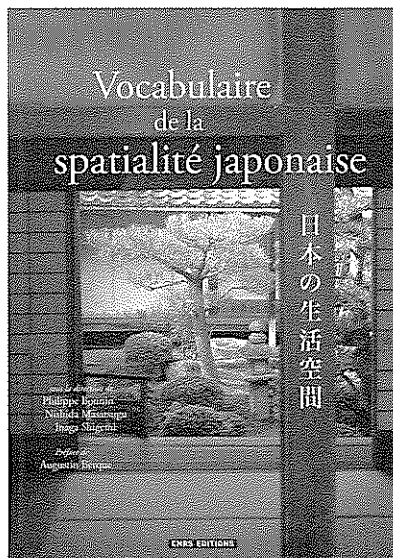
いささか中年老人予備軍の床屋談義となってしまいました（笑）、こうした閉塞状態からの脱皮を訴えるには、日本と外の世界との流通にも目配りできる外部からの若い知恵が不可欠です。言うまでもなく、日本と中国や韓国が目先の利害や面子の潰し合いにうつつを抜かしてよいような時代ではありません。国際政治の舞台を支配する国益や国境線、領土をめぐる不毛なゼロサム競技を突き抜けた世界像の提唱と、それを人々の意識へと徐々に、しかし着実に浸透させることが教育の世界においても急務なのです。

—教育はいつの時代においても重要な課題ですが、現在の教育が必ずしもうまくいっているようには見えません。

国益の張り合いによる時代錯誤な国粋教育が過熱していますが、これがかつての図式に依存した政策集団の延命措置でしかないのも明らかですね。

—では最後に、先生のご研究についてお聞かせください。

私は海賊史観の総合的研究をしています。いままでの話とも密接に関わるのですが、第二次世界大戦後のヤルタ体制、さらに冷戦後のパックス・アメリカーナが終焉し、超大国による世界秩序の維持がもはや不可能となっているのが現代で



Philippe Bonnin、西田雅嗣、稲賀繁美著『Vocabulaire de la spatialité japonaise 日本の生活空間』（CNRS Editions）



「海賊黒ひげ」(1718年)。海賊は古くから映画や小説のモデルとなった (Bridgeman Images/時事通信フォト提供)

す。国民国家という枠組みも機能不全を起こし、世界的な脱国籍状態に法律も金融も対応できなくなっています。そうした秩序の間隙、空白地帯で、広い意味の海賊行為が横行しているのです。

例えば、国際的なブランドの流通とその海賊版の横行とは表裏一体の現象ですが、海賊版を摘発すればそれで正義が貫徹できるという甘い世界ではありません。海賊行為が跋扈する仕組みを解明することなく、見せしめ的に場当たりの懲罰を行使しても、文字通り焼石に水です。また、音声情報に関する既存の著作権や複製権はこの数年でまったく有効性を失い、時代の推移についてゆけない独占企業の倒産を招きましたが、その一方で、技術的には素人にも可能なダウンロードが違法行為として取り締まりの対象となっています。これらの規制こそ違法だと主張する若者たちが「海賊党」と呼ばれる政党を立ち上げ、また思想界でもネットの世界における海賊行為に新たな民主主義の可能性を認めようとする——私から見れば幼稚で危険なものです——そうした議論も流行を見せています。

——歴史を遡ると、海賊行為はずいぶん古くからありましたね。

大英帝国の世界支配の起源にはヴィクトリア女王の認可のもとで活躍した私掠船がありました。海賊行為が「ならずもの」の犯罪として断罪されるか、それとも国益に寄与した手柄となされるかは、国家と海賊集団との関係次第だったわけ

です。日本でも、これは山賊の義賊とでも言うべきでしょうか、国定忠治は討伐され、会津小鉄という京都の侠客は討幕派に命を狙われていましたが、一世代あとに属する清水の次郎長は、茶の輸出や日本海軍の創生にも協力して天寿を全うしています。このように、権力と海賊行為の間には実に淫靡な依存関係があり、それを無視した安易な正義観は偽善の仮面をかぶった悪徳ですらある。反社会的とは何なのか、公益をいかに確保すべきかなどの議論を通じて、商品流通と交易の掟をきちんと定義し直し、法体系の抜本的な再検討を加えないと、理不尽な訴訟沙汰の頻発で日常の商取引すら麻痺しかねない危機が、遠からず、いや、すでに到来しています。

現在、交易に替わる贈与の精神的価値の復権といった議論が人類学の世界から登場しています。その見地から、観客動員数による収益一本槍の風潮に否を突きつける美術の社会的役割を見直す議論もあるわけです。また、アダム・スミスの復権も顕著ですが、そこでは『国富論』のスミスではなく『道徳感情論』のスミスにまで戻って、近代経済学の基本や前提を見直す必要が説かれています。

将来の世界像を模索するためにも海賊史観は不可欠な研究と自負していますが、とても少数の研究者で達成できる「プロジェクト」ではないので、地球市民として不可欠な「ミッション」だという自負と責任感に溢れた、留学生の皆さんを含めた識者の国際的な参加を望んでいます。